

乳腺外来におけるうつ状態診療の実態調査



牧野春彦¹、佐藤泉美²、下妻晃二郎³、大住省三⁴、矢形寛⁵、渡辺隆紀⁶、
福内敦⁷、竹原めぐみ⁸、向井博文⁹、大橋靖雄²

新潟市民病院乳腺科¹、東京大学大学院医学系研究科生物統計学²、
立命館大学総合理工学院生命科学部³、国立病院四国がんセンター
乳腺・内分泌外科⁴、聖路加国際病院プレストセンター⁵、
仙台医療センター乳腺外科⁶、三井記念病院乳腺内分泌外科⁷、
自治医科大学乳腺・総合外科⁸、国立がんセンター東病院化学療法科⁹

背景

- ・ **乳がん患者のうつ**
 - 乳がん患者の50%が診断後1年以内にうつ状態を経験
 - そのうち40%の患者ではうつ状態は90日以上続く
- ・ **うつが乳がんにおよぼす影響**
 - うつの不十分な診断と治療は乳がん患者のQOLを低下させる
 - うつは化学療法の受け入れを低下させ薬物療法のコンプライアンスを悪化させる

目的

- ・ 乳腺外来におけるうつ状態診療の実態を明らかにする

方法

- ・ **対象**
財団法人パブリックヘルスリサーチセンター
がん臨床研究支援事業に参加経験のある
各施設乳がん担当医352人
- ・ **調査方法**
無記名自記式調査票

調査内容

1. 基本情報(年齢、腫瘍医歴など)
2. 精神科系専門医,
臨床心理士・リエゾンナースの有無
3. 月当たり外来患者数
4. 患者の心理的問題
5. うつ状態の診断方法, 重症度の判断
6. 患者への対応
7. 精神科系専門医等への紹介基準
8. 薬剤種類・薬剤選択理由

結果

- ・ 回収率 31.3%(回答数110名)
- ・ 関東 28名(25.5%), 近畿 26名(23.6%)
- ・ 40代62名(56.4%)
- ・ 腫瘍医歴 17.9±6.8年(mean±SD)
- ・ 一般病院 71名(64.6%)
- ・ 精神科系専門医有り 92名(85.2%)
- ・ 外来患者 236.4±142.4 (／月, mean±SD)

乳がん担当医の認識 外来患者の心理的問題

	> 5%	5-20%	20-30%	30% ≤
	(%)			
うつ	45	46	7	3
不安	11	37	25	27
不眠	16	46	27	10

うつ・うつ状態の診断方法

	n	(%)
患者の状態から判断	91	84
特に基準なし	18	17
調査票を用いる	5	5
専門医に任せる	49	45

精神科医への紹介

		ほぼ ない	年 数回	月 数回	それ 以上	P値
		(%)				
院内	精神科医有	20	68	10	2	<.0001
	精神科医無	100	0	0	0	
院外	精神科医有	56	41	3	0	0.001
	精神科医無	6	94	0	0	

心理的介入依頼

		ほぼ ない	年 数回	月 数回	それ 以上	P値
		(%)				
	臨床心理士 リエゾンナース有	35	35	25	5	<.0001
	臨床心理士 リエゾンナース無	91	9	0	0	

第一選択薬

	薬効分類	(%)	薬品名	(%)
1	BZD	42	デパス	33
2	SSRI/ SNRI	31	パキシル	22

BZD:ベンゾジアゼピン系抗不安薬

薬剤選択理由

		(%)
1	使用経験が豊富	60
2	安全性が高い	43
3	効果が高い	25
4	患者の要望	11

「BZDを第一選択としている」を
従属変数とした
ロジスティック回帰

	OR	P値
使用経験が豊富	8.0	0.0003
安全性が高い	6.3	0.0017
専門医・調査票の活用の有無	0.2	0.0035
患者の要望	2.2	0.43
投与回数	2.1	0.64
年齢	1.1	0.81
腫瘍医歴	1.0	0.43
1ヶ月の外来患者数	1.0	0.23
精神科系専門医の有無	1.0	0.93
効果が高い	1.0	0.96
臨床心理士・リエゾンナースの有無	0.9	0.79
他剤と併用可	0.5	0.56

BZD:ベンゾジアゼピン系抗不安薬

「SSRIを第一選択としている」を
従属変数とした
ロジスティック回帰

	OR	P値
効果が高い	7.1	0.0036
年齢	0.3	0.0663
投与回数	2.8	0.53
精神科系専門医の有無	2.0	0.18
専門医・調査票の活用の有無	1.9	0.29
使用経験が豊富	1.9	0.27
患者の要望	1.4	0.77
腫瘍医歴	0.9	0.23
1ヶ月の外来患者数	0.9	0.23
他剤と併用可	0.7	0.78
臨床心理士・リエゾンナースの有無	0.6	0.16
安全性が高い	0.5	0.22

結語

- ・ 乳腺外来におけるうつ状態の診断は患者の症状から行う場合が最も多かった。
- ・ 乳腺外来におけるうつ状態の治療は臨床心理士の介入とデパス、パキシルを中心とした薬物療法であることが明らかとなった。